	初等部だより　２月号	鎌倉女子大学初等部 令和８年１月３０日 第　１１　号

『覚える』から『読み解く』へ

～五十年前の受験生として思うこと～

部　長　　大塚　俊明

大寒寒波に見舞われた列島各地でしたが、初等部敷地内の梅の花は、既に開花の時期を迎えています。厳しい寒さの中にも春の確かな足音が聞こえてまいりました。

２月に入ると、６年生の多くが中学入試の大きな山場を迎えることになります。これまで積み重ねてきた努力を信じ、持てる力を十分に発揮してほしいと思います。子どもたちは、未来に向けてあらゆる可能性に開かれている存在です。結果の如何を問わず、この経験が実り多き学びの通過点になってほしいと心から願っております。

さて受験と言えば、先日行われた大学入学共通テストの問題を眺めながら、私は感慨を深くせずにはいられませんでした。実は私自身、おおよそ五十年前の受験生の一人でした。当時の入試を思い返すと、社会科などの試験は「どれだけ正確に知識を覚えているか」を競う、短文の設問が中心だった記憶があります。

しかし、令和の今、翌日の新聞に掲載された問題群は、まるで別物のようです。冊子数頁に亘るであろう問題は、生徒の会話文、複数の統計グラフ、そして古い史料やニュース記事、地図などを活用した、巧みな構成が図られています。文章量は当時の数倍に膨れ上がっているはずです。もはや「知識がある」のは大前提で、その情報をどう組み合わせて分析し表現するかという「思考のスタミナ」が問われる内容になっています。

この半世紀で、教育のゴールは大きく形を変えました。かつては「正解を早く正確に導き出すこと」が「できる」ことの証でしたが、情報の溢れる現代では「何が正しい情報かを見極め、自分なりの答えを編み出すこと」が求められています。大学入試の変化は、まさに子どもたちがこれから生きていく社会の縮図と言えるでしょう。

こうした変化を前に、私たち初等部の学びも、より豊かなものへと進化させていかなければなりません。低学年のうちから「答えは一つ」という枠を取り払い、図書館でじっくりと本に向き合う時間や、友達の意見を聞いて「そんな考え方もあるのか！」と驚く経験を大切にしたいと考えています。長い文章や複雑な資料を前にしても、「面白そうだな、読み解いてやろう」と思える知的な好奇心と、粘り強く考える力を育むこと、それこそが、十数年後に彼らが直面する未知の課題を乗り越えるための、本当の土台になるはずです。わたくしたちも、「覚えさせる」から「読み解かせる」への指導観の転換が求められているのです。

ご家庭でも、ぜひお子様と一緒にニュースを見たり、散歩道で見つけた不思議について語り合ったりしてみてください。「どうしてだと思う？」という何気ない問いかけが、子どもたちの思考の扉を開く鍵となります。

今年度も残り二ヶ月。子どもたちが「自ら考え、表現する楽しさ」を一つでも多く見つけられるよう、教職員一同、一日一日を大切に歩んでまいります。